

## 先原史時代における居住帯の垂直的遷移現象

—本州西端部の場合—

小野忠瀬

### I 序 言

人類の生活地域は、空間的に伸展し拡充する一方、これを地形の高度に結びつけて垂直的居住帯という見地からみると、永年の・季節的な垂直的遷移の現象がみうけられる。わが国における先史集落の永年の垂直的移動に関しては、早く考古学者が着目して調査や研究を行ない<sup>①</sup>、また先史地理学の立場から、地理学者によって立地の研究がなされている<sup>②</sup>。

筆者は、日本列島の沖積世における垂直的居住帯の遷移現象に関心をもち、若干の発表を行なってきたのであるが<sup>③</sup>、先学のき尾に付し、考古地理学の立場から引き続き調査と研究を続けている。以前に行なった筆者の研究は特に弥生文化期に重点をおき、この種の現象の実態と、かかる現象を生ぜしめた原因について考察を試みた。本稿では、考古地理学の見地から、単に弥生文化の時代に止まらず、縄文・弥生・古墳文化の時代を通じて、本州の西端地方にみられる実態を明らかにするとともに、厚い空間から遷移の傾向をとらえ、筆者自身の爾後の研究への一つの足掛りにすることにした。

## II 本研究でとった考古地理学的方法

考古地理学 archaeological geography という名の学問は新しく、その内容をなす具体的な研究例が断片的で、新学のもつ固有の任務や研究法に関する考え方は、研究者によつて必ずしも一致していないようである。藤岡謙二郎博士が提唱され、かつて筆者も、歴史地理学における考古地理学の任務や方法について触れたことがあったが、ここでのこの研究でとった立場や方法を理解してもらうために必要な範囲で、かいつまんで卑見を述べておくことにする。

歴史地理学の一部門としての考古地理学の固有の任務は、地縁的な遺跡や遺物の側面から人類時代の過去の地理を究明することである。したがつてその特質は資料と方法にあるといつてよい。考古学と資料やその採集の方法を共有しながらも違うところは、考古学が遺跡や遺物を史実を語る記念物として扱い、遺跡や遺物からみた歴史の究明を目的とするのに対して、考古地理学は、遺跡や遺物を土地や地域に結びつけた地縁的・地域的な資料として取り扱い、これらを過去の地理を明らかにするための資料とし手段として活用する点に差異がある。また文献地理学と、究極の目的と地理学的方法を共にする点で共通するところがあるが、その相異は、文献学的資料や知見は参考にするに止め、それらを予察の段階や研究の過程において補助手段とする点にある。純粹にして独得な方法は、遺跡や遺物が結びついた土地や地域と、物的証跡たる地縁的な考古資料そのものから考察し、地理学的方法を通して過去の地理を究明することである。歴史地理学の研究に必要な文献地理学や、第四紀学あるいは民族地理学もまた、それぞれ独自の資料と固有な方法をもっており、人類時代の総合的な過去の地理の究明を目的とする広義の歴史地理学は、それに必要ならぬ資料と方法を駆使するより高次の存在である。

さらにまた考古地理学は、資料がもつ二面性から、自然科学と文化科学の両面的な性格をもっている。したがって上記の諸分野の方法や成果の間隙を結び合せる役割を有し、地表的観察と地下的観察によって、歴史地理学が要求する内容を充足する特殊な方法であるということが出来る。すなわち、遺跡や遺物は過去の文化現象や文化地域を考察する資料になる反面、地層に挟在した化石ともみることが出来るので、自然史や過去の自然地域史の研究を行なう第四紀学の資料にも使われ、歴史地理学における自然地理と人文地理の両分野に資料と成果を供与することが出来る。

考古地理学の研究には、対象の取り上げ方によって、厚い空間を<sup>①</sup>割りにする場合と縦割りにする場合とがある。すなわち、過去のある時代や時点の空間を対象にする先史地理学<sup>②</sup>・原史地理学<sup>③</sup>・有史地理学と、それらをさらに細分した薄い空間の研究が前者であつて、地域変遷史や<sup>④</sup>、厚い空間においてとらえた特定の地理的事象を地理学的方法を通して研究するのが後者である。資料のもつ価値や先学の努力によって、いわゆる横割りの先史地理学は広く知られているのであるが、特定の地理的事象を対象に、考古地理学的方法によつて全時代を縦に一貫した研究はもちろ<sup>⑤</sup>ん、有史時代のこの種の研究例は極めて少ない。本稿は、上に記した縦割法のうちの後者の一例である。

居住帯の垂直的な遷移現象の研究は、植生の垂直的分布やその永年の変化の研究に似たところがある。したがつて特定地域毎に実態を克明に調査する一方、これを全地球表面に拡張し、緯度の高低や高度による気温の相異、居住の土台となる土地の高低起伏、動植物の垂直的分布などとの関連を考慮し、より広い観点から観察する必要がある。しかし居住帯は植物の分布と異なり、居住の場所は、社会環境の中で生活する人間自身が決定するので、自然環境の条件のほかに、時代や地域の政治的・社会経済史的條件に深い関心を払わねばならない。

ここでいう居住帯は、居住地を中心とした人類の活動地域を含めた概念である。過去における居住帯の垂直的な巾

とその重心帯は、遺跡や遺物発見地を指標とし、それらの立地や分布の範圍で示すことができる。過去の住民の生活を土地や地域に結びつけ、より具体的につかむためには、遺跡や遺物発見地の標高と比高や地貌などから觀察することが必要である。標高は気温との関係を知る上で意義があり、山麓の傾斜交換線からの高さをとった比高は、地貌とともに日常生活の難易や生産地区との関係を窺う上に有効である。

居住帯の高度は研究者によって規準が若干異なるが、本稿では、所在地の地形が日常の生活に適しているかどうかということ、水田耕作への難易を考慮して、山麓の傾斜交換線以下の沖積地にある遺跡を低地性遺跡、比高が大体十五メートル以下の低い台地や山麓の緩斜面にあるものを台地・山麓帯遺跡、比高十五メートル以上で斜面が急な高い台地や、山頂・稜線・山腹などの遺跡を高地性遺跡とよぶことにし、また低地性遺跡の比高は、河床からの高さを取り、砂浜遺跡の比高は現在の生活地表を規準にした。

次に個々の遺跡の文化期についてであるが、採集されている遺物が多かつたり、すでに発掘調査済みで所屬文化期が明らかにされている遺跡を直接の対象として取りあげ(表の・印)、単独の遺物発見地や、未発掘のため文化小期が明らかでないものは表に○印を付し、また遺物が少なく、所屬文化期が曖昧なものは半黒円印で示し、ともに参考資料として取り扱うことにした。現在文化小期がわかつている遺跡でも、未発掘遺跡はその底に時代の違うものが潜んでいる疑いがあるので、今後の調査で若干修正される可能性を含んでいる。しかし大勢としては、将来ともさしたる変動は生じないと考えられるので、傾向をとらえるうえには支障はないであろう。

同一地域を同一条件で取り扱うのが理想であるが、資料のもつ性質上必ずしも理想通りにはいかず、処理上若干の操作が必要になる。遺跡の数が比較的少ない縄文・弥生の兩時代の遺跡は、瀬戸内斜面・響灘斜面および日本海側の

北長門斜面毎に検討した上で全地域を一度に扱い、遺跡の数が夥しいわりに、調査に精粗の差や、調査上地域的な偏倚が多い古墳時代については、調査が進んでいる地域毎に集計して検討し、全域的には要点をとらえて傾向を明らかにすることにした。また有史時代の詳細は別の機会に譲ることにし、ここでは先原史時代を浮び上らせる範囲で簡単に触れておくことにする。

このように本稿では、地形上の高距や地貌と、個々の遺跡の所屬文化期、居住帯の垂直的振幅にみられる地域差との三つの角度から調査し、本州の西端部における居住帯の垂直的遷移に現われた地域性の抽出を試みたのである。

### Ⅲ 居住帯の垂直的遷移現象

高度的居住帯の垂直的遷移の実態をとらえるために、遺跡や遺物発見地を文化小期と標高・比高および地貌の観点から観察し、地形の高度と結びついた時代的な遷移について要記することにする。

#### 1、縄文・弥生文化期における高度的居住帯の時代的振幅と重心帯の垂直的遷移

居住帯の最高と最低の高さは第1表の通りで、その垂直的な巾は第2表に示したごとく、高度的な巾が文化小期によって異なり、一上一下的な遷移を示している。

縄文早期と前期は不思議なほどよく似た高度的分布を示し、標高では十五メートル以下と五十メートルから百五十メートル、二百メートルから二百八十五メートルの三つのグループがみうけられ、居住帯の高度の巾が広い。その重心帯は十五メートル以下の低い台地や海浜の低地帯にあるが、秋吉台では比高にして百メートルから百八十五メートルの高度に立地し、早期や前期のころすでに海岸はもちろん内陸のカルスト高原にも居住していたことがわかるので

第1表 標高と比高からみた山口県域の縄文・弥生時代の遺跡高度分布

標高 m	縄文文化期					弥生文化期					計
	早期	前期	中期	後期	不明	前期	中期	後期	不明		
450											1
400				●	○						2
350				●●●	○	●●	●●				8
300				●●			●				6
250	●●	●		●●			●	●●●●			8
200	●	●●		●			●				2
150				●		○	●	●●●●●●●●	○●○		15
100	●●									●	1
95								●●●●●●	●●		6
90		●						●●●●	●●		3
85							●	●●●●●●●●	○		12
80							●	●	●		2
75				●	○		●●	●●●●			8
70							●				1
65							●●●●	●●			4
60					○					○	2
55	●	●		●●	●		●●●●●●●●	○			14
50							●●●●●●●●	○			11
45					●		●●●●●●●●	○			11
40				●	○		●●●●●●●●	○			10
35							●●●●●●●●	○			8
30							●●●●●●●●	○			11
25				●●●●			●●●●●●●●	○●○			16
20							●●●●●●●●	○			9
15	●	●		●●	●		●●●●●●●●	○●●	○●○		18
10	●	●	●●	●●●●	●●	○●○	●●●●●●●●	○	○	○	27
5	●	●●●●	●●●●	●●●●	○●○	●●●●	●●●●●●●●	○	○	○	21
0	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	○●○	●●●●	●●●●●●●●	○●○	○●○	○	83
計	8	13	5	27	9	8	20	72	55	19	236

標高 m	縄文文化期					弥生文化期					計	
	早期	前期	中期	後期	不明	前期	中期	後期	不明			
450												
400												
350												
300										●		1
250	●									●		2
200	●●	●								●●		5
150	●●									●●●●	●	6
100												
95												
90												
85												
80												
75										●●		2
70										●●		2
65										●●		2
60										●●		3
55												
50										●●●●		6
45												
40										●●●●	●●	5
35										●●●●●●●●	●●	14
30										●●●●●●●●	○	5
25										●●●●●●●●	○●○	19
20										●●●●●●●●	○	13
15										○	○	16
10	●●	●●	●●●●	●●	○●○	●●●●	●●●●●●●●	○	○	○	52	
5	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	○●○	●●●●	●●●●●●●●	○●○	○●○	○	83	
0	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	○●○	●●●●	●●●●●●●●	○●○	○●○	○	83	
計	8	13	5	27	9	8	20	72	55	19	236	

第2表 地貌からみた山口県域の縄文弥生時代の遺跡の高度分布

地 名	文化期						計	地 名	文化期						計
	早期	前期	中期	後期	晩期	不明			早期	前期	中期	後期	不明		
山頂・丘陵頂								山頂・丘陵頂	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	21
山麓・山腹								山麓・山腹	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	31
高位山麓斜面 高位台地	●●●●●●●●	●●●●●●●●		●		○	9	高位山麓斜面 高位台地	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	21
低位山麓斜面 低位台地	●	●●		●●●●●●●●		○○○	18	低位山麓斜面 低位台地	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	55
扇状地	●	●●		●●●●●●●●			12	扇状地	●	●●		●●●●●●●●			4
山麓以下低地		○		●	●		3	山麓以下低地	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	25	
砂浜	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●	●●●●●●●●	○○○	25	砂浜	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	9	
潟湖面下				●●			2	計	20	72	55	19	166		
計	8	13	4	27	9	8	69								

ある。これらをさらに、具体的な生活地表と結びつけた地貌から観察すると、月崎・梶栗浜・宮ノ原・美濃ヶ浜のような砂浜遺跡や、船ヶ窪・小郡久保遺跡などのようなカルスト台地に多く、紫野遺跡のごとく低い海岸の洪積台地や、丸山・小高野遺跡のような山麓の斜面、用田・大谷ヶ谷遺跡などの扇状地にも立地している。しかし河川の氾濫原には確かな遺跡の発見例がなく、僅かに下関市の神田川河床から、上流から流れてきた前期の磨滅した小土器片がみつかつているにすぎず、当時河畔の洪瀾地がまだ十分に発達していなかったことを示唆している。

縄文中期は、地貌はもちろん標高や比高が低く、居住帯が著しく下降したことを示唆し、中部山岳地方の場合<sup>⑥</sup>と著しく異なっていることを指摘することができる。すなわち、宮ノ原・潮待・美濃ヶ浜や赤石遺跡などのように、標高が十二メートル未満、比高にして五メートル以下の砂礫浜や砂堆丘に限られ、内陸地域から全くみつからない。しかもそれらは、波浪によ

って運搬された砂礫層の中に堆積しており、この時代が海退期<sup>⑦</sup>に当ることと関連して特に注意をひく。

縄文後期は遺跡の発見数において縄文時代中一番多く、標高からみた居住帯の上限もまた早期や前期よりも高い。最も高い確かな遺跡は、阿東町の度川遺跡で二百六十メートルを測るが、文化小期のやや不明確なものは、道祖原の三百七十メートルや、八代盆地のユウシン坂・原・大ヶ原・下吉田・下仏坂や奥関屋遺跡など三百メートル台の高度

に分布している。低い遺跡も多く、熊毛郡の田ノ浦や岩田遺跡のように満潮面下二十五センチメートルから五十センチメートルのものもあつて、標高において、縄文時代のうちで居住帯の垂直的な巾が最も広い。遺跡の高度的分布は百五十メートルから三百七十メートルと、十五メートル以下に集まっているが、比高は何れも低く、高いものでも二十五メートル未満で、重心帯は十メートル以下の山麓帯や扇状地から海浜にわたる低地帯である。遺跡が立地する土地の地貌は、官ノ馬場・上ノ原・長沢池遺跡などのような低い山麓の斜面や台地と、広末・後河原・用田遺跡のような扇状地に多い。また大繁枝・月崎・美濃ヶ浜・潮待・神田・岩田や田ノ浦遺跡のごとく、砂礫浜や砂浜に立地し、これらの多くは波浪が運んで再堆積し、磯浪で擾乱されている。内陸の河成段丘には、比高二十メートル余りの度川遺跡があるほかには今のところみつからないし、一方、山麓線以下の洪涵地やバックマーシユにも少なく、僅かに長府町の安養寺遺跡が知られているにすぎない。

縄文晩期の遺跡は、大体において後期の遺跡の分布や立地に似ており、それらの多くは後期の遺跡に重複しているが、遺跡の発見例が意外に少なく、標高や比高が共に下降している。標高からみた最高の遺跡は、玖珂盆地の用田扇状地の扇頂付近にある用田遺跡の五十メートルで、低い遺跡は岩田遺跡のように満潮面下の遺跡がある。比高において五メートル以下のものが圧倒的に多く、岩田・尾国・後河原・椿・用田の諸遺跡のように、扇状地や、美濃ヶ浜や月崎遺跡のような海岸の砂堆に立地し、高度的居住帯の重心は後期と同様低地帯にある。なおこの期の砂浜遺跡の多くは、波浪の擾乱を蒙っている。

弥生文化の前期の遺跡を標高からみると、響灘海岸の沖田と土井ヶ浜や中ノ浜遺跡などのような五メートル以下の低地から、貞行や惣ノ尻遺跡のごとく三百五十メートルを測る内陸の山間盆地にもみられ、居住帯の垂直的な巾が広



いけれども、比高はいずれも低く、高いものでも二十五メートル以下で、重心帯は十メートル以下の低地帯にある。この期の遺跡は北九州に近い響灘の海岸地帯に多く、有帆川以東の地域にはまばらに分布し、しかもこれらのうち、前半期のものは現在のところ響灘の海岸に集まり、内陸地域の遺跡の多くは中葉から後半のものである。

海岸地帯では、土井ヶ浜や中ノ浜遺跡のように海岸の砂堆丘や、綾羅木遺跡のごとく十三メートルばかりの低い洪積台地とか、岩田遺跡のように海に張り出した小扇状地に立地している。内陸地域では、秋芳町の瀬戸遺跡のように溶蝕盆地の縁辺にある低い洪積台地や、大日台遺跡のごとく低い丘陵の頂に立地しているほか、徳佐盆地では惣ノ尻や貞行遺跡のように盆地床にみられるほか、田部盆地の岸本遺跡のごとく盆地床の水田面下に埋没している遺跡もある。

弥生前期の高度的居住帯の一つの特色は、後半になって垂直的な巾に若干の変化が現われてきていることである。すなわち、前半の遺跡の多くは響灘海岸の砂浜や低い洪積台地に立地し、すべて低い場所にあるのに対し、後半から末葉になると内陸地域にひろがるとともに、低地性遺跡のほかに、高地性遺跡があらわれ、時代が降るにつれて居住帯の垂直的な巾が多少広くなっているのである。また貝塚を伴う遺跡は前半期にはなく、堂ノ尾山遺跡のごとく後半になって現われ、しかも遺跡の数や貝殻の量が著しく少ないところに特色がある。

弥生文化の中期の遺跡は全地域に分布し、後期とともに発見例が頗る多い。高度的居住帯の巾は弥生文化期のうちで最も広く、前期に比べると著しい相異がみられる。高い遺跡は標高三百二十五メートルの祝島A遺跡で、低い遺跡は下関市の梶栗浜や六連島遺跡で僅か二・五メートルを測り、標高からみた居住帯の巾は前期と変らないが、比高や所在地の地貌において顕著な変化が認められる。なお、中期の遺跡のうち、響灘海岸の遺跡には、前期から中期にかけてまたがる時期のものが多く、周防部では前期の遺跡に重複しているものは極めて少ない。

祝島A遺跡の比高は、島麓の山麓線から三百十五メートル内外もあり、秋吉台の馬コロビ遺跡は台麓から百五十メートルを超え、このほか倉掛山の山腹や、祝島中腹の祝島B遺跡なども比高が百メートル以上におよび、いずれも当時水田耕作を営むことが不可能なような地形に立地している。天王山・形山・井上山山頂・上ノ原・天王Aと岡山や石光遺跡などは、比高が三十メートルから六十五メートルの丘陵の頂や尾根とか高い台地に営まれ、これらも水田耕作に困難な場所に立地している。奈良二ツ池・開明・中郷・天王台・井上山・上ノ原などの村落遺跡は、比高二十メートルから三十メートルの丘陵頂や尾根とか高い台地に営まれ、また鎌浦・下薙野・松ヶ迫・北河内・亀山公園・七社・荻峠・片山・七辻遺跡や引野貝塚なども、丘陵頂とか稜線・山腹・山麓の台地の上などに立地し、平地を見下す比高十メートルから二十メートルの高度にある。下高塚・塚ノ原・伊倉・田島ヶ丘や水田遺跡などのように、五メートルから十メートル内外を測る山麓の低い台地や尾根の末端に立地するものや、且・船場・土井ヶ浜・梶栗浜・梶栗・六連島などのように、山麓線や砂浜にもみられるが、扇状地からはあまり発見されていない。ただ、現在も沈水地形に特色をもつ徳山湾の黒髪島遺跡は満潮面下の砂浜に立地し、弥生中期以後のある時期以後に沈降したことを示唆している。

総括的にいうと、中期の居住帯の重心は五十〜六十メートル以下の地帯であるが、それ以上の高地にも分布地帯がみうけられ、ことに百メートルから三百メートルにおよぶ高地帯にも弱い重心帯が認められる。また五十メートル以下の重心帯を地貌の面から観察すると、低い山頂や丘陵頂・山腹・台地などのような高地性遺跡が卓越し、山麓線以下の低地性遺跡が少なく、全体として重心地帯が上昇しているところに特色がある。

弥生文化の時代には貝塚をもつ村落の遺跡が少ないが、そのうち北迫・引野・中郷・祝島A遺跡などその大半が中

期に集まり、それらはいずれも比高の高い丘陵の頂上付近に立地していて、海浜からは発見されていない。

弥生文化の後期の居住帯は、大体中期と同様で、周防部には中期の場所を踏襲しているものが多く、居住帯の上限が若干下降している程度である。

標高からみた居住帯の巾は、二百メートルにおよぶ周防大島の山稜にある鶯ノ巢遺跡や、錦川上流の松原遺跡で、低い遺跡は六連島の二・五と四メートルで中期について巾が広い。また標高からみた遺跡の高度的分布は二百メートル以下の地帯にほぼ万遍にみられ、その重心帯は中期と同様五十メートル以下であるが、比高からみると五十メートル以下と五十五メートル以上八十メートル、百メートルから二百メートルの地帯に分布している。しかし、五十メートル以下の地帯を遺跡立地の地貌に則して吟味すると、山麓線以上の丘陵や台地に立地する高地性遺跡が卓越し、中期と同じように重心帯がやや高く、低地性遺跡が少ない。

## 2、古墳文化期における高度的居住帯の時代の振幅と重心帯の垂直的遷移

さきに記したように、古墳時代の遺跡はその数が多いので万遍な調査が遅れ、統計的な処理ができる段階にまで進んでいない。したがってここでは、一応統計的に扱える若干の地域を中心に取り上げ、集落遺跡と古墳の高度的分布を勘案しながら、この時代の居住帯の垂直的遷移傾向を推考することにした。

**下関市域** 標高からみた高度的分布の上限は、百二十メートルの小野古墳と祭祀遺跡らしい百十メートルの竜王山遺跡で、下限は五メートル未満の武久浜古墳、永田辻古墳と生野神社古墳や二・五と四メートルの六連島遺跡であるが、大部分が四十五メートル以下の地帯に集まり、その巾が狭い(第3表)。これを比高からみると九十メートル以下の地帯になり、しかも二十五メートル余りの小門遺跡以下の地帯に多く、集落遺跡のほとんどが十メートル以下の

第3表 標高・比高と地貌からみた下関市域の古墳時代の遺跡の高度分布

標高	古墳		集落址		計	標高	古墳		集落址		計	地貌	古墳時代		計
	前中期	後期	前中期	後期			前中期	後期	前中期	後期			前中期	後期	
150		●		●	2	150						山頂・丘陵頂	●●●●	7	
100						100						山腹	●●●●	7	
95						95						高位山麓斜面	●●●	3	
90						90				●	1	低位山麓斜面	●●●●●●●●	40	
85						85						低位台地	●●●●●●●●		
80						80						低位台地斜面	●●●●●●●●		
75						75						扇状地		0	
70						70						山麓線以下の低地	●●●●●	6	
65						65		●			1	砂堆地	●●●	3	
60						60						計	5	61	66
55						55									
50						50									
45	●	●●●●		●	6	45									
40		●●●●			5	40									
35		●			1	35									
30		●●●			3	30				●	1				
25		●●●●●			13	25		●●●●●			5				
20	●●	●●●●●		●	11	20		●●●●			4				
15	●	●●●●●		●●	12	15	●●	●●●●●			14				
10		●●●●		●●	9	10	●	●●●●●		●●	17				
5	●	●●		●	4	5	●●	●●●●●		●●●●	23				
0						0	●●	●●●●●		●●●●	23				
計	5	53	0	8	66	計	5	53		8	66				

低い場所に立地している。また古墳や集落遺跡を含めた垂直的な主な居住空間は二十五メートル以下で、その重心は十メートル以下の低い台地や沖積低地である。田部盆地を中心とする吉田川の流域は下関市域によく似た高度的分布を示し、古墳は低い丘陵や山麓の斜面に、村落の推定遺跡は山麓帯に集まり、居住帯の垂直的な巾が低くて狭い。

**宇部市域**⑥ 何れも標高四十五メートル以下の低い丘陵や洪積台地から砂堆地帯にかけて分布し、ここでも居住帯の垂直的な巾が狭い。前期の村落推定遺跡は本山遺跡群のように、低い丘陵の尾根の末端部の南斜面にみられ、組合箱式石棺を用いた古式の古墳は、王子古墳のように標高三十メートル余りの丘頂や、大須賀・中須賀古墳のごとく標高七メートル内外の海岸の浜堤砂丘に立地している。後期の古墳は山麓や台地に営まれ、この期の村落址は標高にして三十五メートル以下比高二十メートル以下の低い洪積台地や丘陵にみられ、本地域では前期からすでに低地帯に存在する。なお波雁ヶ浜には浜堤に三層の炉址をもつ師菜式遺跡がある。

**山口盆地**⑦ や榎野川の河口付近には、向山や兜山などの中期古墳が小丘の頂上に営まれ、赤妻古墳は山麓線以下の低平地に存在し、箱式石棺や横穴式石室墳が、盆地周縁の山麓や秋穂二島のような陸繋島に群在する。それらの高度は標高五十メートル以下、比高にして二十メートル以下の低い地帯に分布している。村落の推定遺跡はほとんどが後期のもので、比高十五メートル以下の低い丘や山麓帯から盆地床にかけて点在している。

**防府平野**⑧ 標高からみると六メートルから六十メートルの間、比高二メートルから二十メートルの地帯に分布している。比高約百三十メートルを測る桑山古墳のような孤立丘の稜線や、大日古墳のごとく山麓の小丘、あるいは塚原古墳群・片山古墳群や多々良古墳群などのように平野周辺の山麓の斜面とか、女山古墳群のようにもとの島の山腹にみられ、なかには、車塚古墳や鏡物師古墳のように後期の古墳は標高七・五メートル、比高三メートル内外の洪積台

第4表 標高・比高と地貌からみた島田川流域の古墳時代遺跡の高度分布

標高 m	古墳時代		計	標高 m	古墳時代		計	地 貌	古墳時代		計
	前期	後期			前期	後期			前期	後期	
200	●		1	200				山頂・丘陵頂	●	1	
150	●●●		3	150				山麓・山腹	●●●●●●●●	8	
100				100				高位山麓斜面 高位台地	●● ●●	4	
95				95				低位山麓斜面 低位台地	●●●●●●●●●●	15	
90				90				扇状地			
85				85				山麓線 以下の低平地	● ●●●●	5	
80	●●●		3	80	●	1		砂堆地	●	1	
75				75				計	14 20	34	
70				70							
65				65							
60	● ●●●		4	60							
55		●●●●	4	55							
50	●		1	50		●	1				
45				45		●	1				
40				40							
35	●● ●●		4	35							
30	● ●●		3	30							
25	●● ●●●●		6	25	●		1				
20	● ●●		3	20	●●●●●●		6				
15		●	1	15	●●●●●●●●		7				
10				10	●●●●●●●●●●		14				
5				5	●●●●●●●●●●		14				
0	●		1	0	●●●●●●●●●●		14				
計	15	19	34	計	15	19	34				

地にも点在している。この地域でも村落遺跡はあまり発見されていないが、土師器や須恵器を伴う遺物散布が山麓帯から扇状地や低い洪積台地に分布し、それらの高度は標高比高が共に低い。

徳山・下松地域④標高からみた古墳分布の高度的な市は五メートルから百メートル余りで、特に五メートルから六十五メートルの間に集まり、村落の推定遺跡は五メートル余りから七十五メートルの間に分布している。

しかしこれを比高と地貌からみると、古墳の高いものでも山根古墳のように五十メートル足らずで、大部分が三十五

メートル以下の丘陵の稜線や山腹の斜面とか、平野周辺の山麓帯や台地に立地し、なかには山麓線以下の緩斜地や、前期の宮ノ州古墳のように陸繋砂州の上に営まれているものもある。

村落の推定遺跡の比高は、岡市や中戸原遺跡のように二十五メートル内外の山麓斜面や台地のものから、城山山麓・浴・河内中・しらむが森・西久米や末武・西豊井・寺迫などのように、十メートル以下の山麓帯から低地帯に分布している。この地域では、前期や中期の古墳や集落址が後期のものより低い場所に立地しているものがあるが、全体的にみると時代が降るにつれて居住帯の重心が低地に下降している。

**島田川流域**⑥ 居住帯の上限は標高百八十メートルの平畑遺跡が最高で、その高度的な巾は高度三メートル以上百八十メートルの間である。しかし比高は八十五メートル以下で、大部分が二十メートル以下に集まり、特に十メートル以下の低地性遺跡が多く、平畑遺跡は異例である。またこれらを地貌からみると、丘陵地帯の尾根の上や、台地、山腹の斜面から山麓帯や低地帯にかけて分布し、この地域でも、川尻遺跡のように前期から低地に立地しているものもあるが、一般に時代が降るにつれて低地に下降する傾向を示している(第4表)。

この地の南にひろがる熊毛半島から周防大島にかけての地域でも、大体同じような傾向がみられる。茶臼山古墳、神花山古墳、白鳥古墳など前期や中期の古墳は低い丘の頂上に立地しているが、多くの後期古墳は山麓の斜面や山麓帯に営まれ、村落の推定遺跡は山麓線付近に分布している。しかし祭祀土器ばかりを出す単純遺跡は、一般の村落址よりも高い場所に分布し、丘の上や海に臨んだ丘上に立地している。なお、防衛遺跡と考えられる神籬石で名高い石城山は、標高三百五十二メートル山麓から約三百三十メートルの比高をもち、一際高い山頂に所在している。

**内陸山間地域の豊田盆地・秋吉地方**⑦と**徳佐盆地や玖珂盆地**⑧なども、海岸地帯と大体同様な立地を示し、内陸地

域では標高が高いが比高はむしろ低く、三十メートル以下の尾根の上や山麓の斜面から低い台地や盆地床にかけて分布している。

### 3. 条里の立地と有史時代の高度的居住帯

七世紀の中葉に施行せられた条里制度は、考古学上古墳文化の後期の後半に相当するが、弥生時代から発達してきた濃本主義が制度的に確立して民衆が低地帯の耕地に吸引され、集落が定着したという意味において、条里の分布と立地は居住帯の垂直的な重心帯を知る上の補助的な指標になると思う。

山口県で、現在までに知られている条里地割の分布地域は十箇所であるが、厚狭川の流域を境として東と西とで、それらが立地する地形にかなり明瞭な差異がみられる。厚狭川から東の条里は、下松・富海・山口などのように扇状地や、久米や防府の東西佐波令のような山麓の緩斜地で、河畔の洪溜地にはほとんどみられない<sup>⑩</sup>。これに対して厚狭川以西では比高が著しく低く、豊田盆地の西市のような盆地床や、綾羅木川流域のように河畔の沖積低地に立地している。このように耕地の地形からみた居住帯の重心は、西に低く東が幾分高いのであるが、この地域差は、専ら地形の制約に基因しているようである。

中世や近世の遺跡は城砦を除くとその発見例が少なく、村落の場所は現在も踏襲されているものが多い。中世の居住帯の上限は、陰遁集落の廃墟と考えられる平家嶽南麓の平家屋敷跡で、標高約七百九十メートルを測り、下限は下河内の三メートル内外である。平家屋敷跡の高さは先史時代から現代までのうちで最も高く、比高は下河内の〇メートルから矢櫃の三百五十メートルで、中世に俄然高地性集落が出現し、縄文時代以来の最大の高度の市を示している。



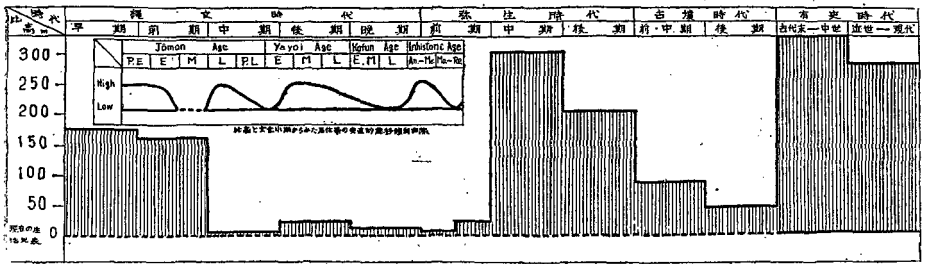
中世の土器を出す高度の高い遺物散布地は、周防山地の長穂町付近や<sup>㊸</sup>秋吉台地<sup>㊹</sup>が知られている。長穂付近では標高約三百メートル内外の山麓線付近に点在し、標高は高いが比高は五メートル内外で低く、秋吉台地は標高二百七十メートル内外比高百七十メートルばかりの高い高原面に立地し、前者の地域では現在も同じ場所に村落が営まれているが、秋吉台地では近世に姿を消している。このほか中世や近世に起源をもつ集落は、周防山地から阿武山地にわたる前輪廻の高原面や、山麓線付近から海岸の干拓新田にまで分布し、居住帯の垂直的な巾が広い。中世の重心帯は山麓線付近で大体古代の重心帯を踏襲しているが、近世になると山城が棄たれ、デルタや河畔の低湿地と干拓地に進出し、近代以後は山麓線以下の沖積低地帯に下っている。

近代工業が発達した現代では、工業都市が拡充されるにつれて海岸の埋立地が造成され<sup>㊺</sup>、とくに第二次大戦後、埋立地の拡張と都市背後の台地が住宅化される一方、内陸の高原に戦災・引揚者が集団的に入植するなど、四度び居住帯の垂直的な巾が拡張してきている。

#### IV 居住帯の垂直的遷移傾向と問題点

次に、先原史時代を中心に居住帯の垂直的遷移の傾向を要約しながら、それから引き出される問題点を指摘しておくことにしよう。

第1図と第2図は、縄文早期から現在にいたる高度的居住帯の時代的な遷移傾向を、高い視点から巨視的にとらえるために作った図である。この図からまず注意をひくことは、本地域における高度的居住帯の上限界が、標高にして約七百九十メートル、比高三百六十メートルばかりで中部山岳地方に比べて著しく低く、垂直的な生活空間が狭いこ



第1図 比高からみた高度的居住帯の変遷図

とである。地形上の最高点は約千三百メートルを測る寂地山脈中の寂地山で、気候上、内陸山間地に冬季一メートル内外の積雪があるほかは、日常生活にさしたる支障がないにもかかわらず、実際の居住空間の高度が八百メートルに足らないのは、地形そのものの高度が低く、八百メートル以上の土地が急な傾斜の山地であるためで、その原因を地形の制約に求めることができる。

先史時代以来、文化小期によって居住帯に垂直的な振幅があり、居住の重心帯の時代的な遷移の中から幾つかの問題をひき出すことができる。

縄文早期と前期の巾は標高にして約二百八十メートル、比高百八十メートル台で共に広く、縄文時代の初期から海岸地帯はもちろん内陸の高原にも居住し、早くから生活空間が広がったことがわかる。また海岸の砂浜遺跡のなかには、海水で運搬され、波浪の擾乱を蒙った砂礫浜や砂堆丘に含まれているものもあるので、遺跡の処女地点が、現在の海面より低い場所に存在するものもあつたことを予想することができる。

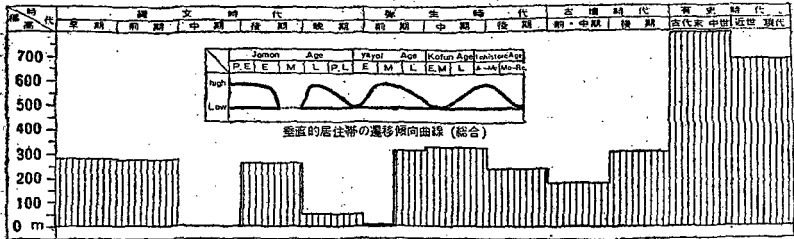
縄文中期の遺跡は、踏査の際特に注意して探査したにもかかわらず、今日まで内陸地域から発見されていない。この時期には居住帯の重心が低いうえに、その巾が標高比高とも五メートル内外で著しく狭く、中期の集落遺跡が

高地に卓越する中部地方と全く対蹠的である点、特に留意する必要がある。しかも現在発見されている遺跡はいずれも砂礫浜や砂堆地に含まれた二次的包含層で、この時期が海退期に当ることと考え合せると、当時の居住帯の下限が現在の海面下にあつたことを推測することができるのであつて、ここにも一つの問題が横わつている。

縄文後期の居住帯の垂直的な巾は、標高からみると二百六十メートル余りであるが、比高の巾はずっと低く二十メートル台で、扇状地や山麓帯から海浜の砂層や砂礫層に含まれ、その多くは波浪の擾乱をうけたものもあり、期中よりは高いが重心帯が全体として低く、居住帯の垂直的な巾も狭い。晩期は後期に似ているが、標高や比高がさらに低く、扇状地や海岸の低地帯に立地し、居住帯の垂直的な巾が一層狭く、重心帯が低地帯に下り、弥生前期の前半の立地に似ていることに注意をひく。

弥生文化の前期の前半は、高度的居住帯の巾が狭く重心帯が低いけれども、その後半から巾を増し、後半には内陸の山間盆地にもあらわれ、標高において三百メートル余りの巾をもつが比高から見ると依然低く、その巾は二十メートルばかりである。中期になると俄然比高の巾が拡がり、水田耕作に不可能か不便な山頂や、丘陵の稜線とか高い台地に出現し、標高比高が共に三百二十メートル台の巾を示している。後期は中期に似ているが高距において下降する傾向を示し、重心帯は引続きいて山頂や丘陵の尾根にみられる。このように、弥生時代の前期の末、特に中期から後期の時期に、居住帯の垂直的な巾が拡張し、しかも比高や地貌の上で高い場所に重心があるということは、低地で営む水田耕作が普及してきた時代であるだけに、このような現象を生ぜしめた原因に深い関心がひかれるのである。

古墳文化の前期と中期に立地において似ているところが多く、標高からみた居住帯の巾は百七十メートル余り、比高において九十メートルを測り、弥生文化の後期につづいてまだ高い場所にみうけられる。ところが後期になると、



第2図 本州西端部の高度的居住帯の垂直的変遷図

標高が高いわりに比高が低く、居住帯の重心が下降し、水田耕作の拡充に伴って低地帯に進出したことを示唆している。

中世は、さきに記したごとく、標高比高とも居住帯の垂直的な本地方における居住帯中最も広いが、重心帯は低く、古代と同様山麓線付近にある。このような中世における高度的居住帯の拡張は、墾田による山間地域の開発のほかに、動乱の世相を反映して、山城や隠遁集落が出現したことがその原因ではないかと考えられるが、さらに深く探究する必要がある。

近世以後の村落には、中世の村落の場所を踏襲しているものが多いが、泰平な時代社会を反映してか、居住帯の上限界線が下る傾向をみせ、干拓新田の開発と相まって重心帯が低地帯に下っている。ところが、近代工業都市が拡充した昭和時代、ことに、軍事的・社会経済的に緊張した第二次大戦中から平和が訪れた戦後にかけて、重心帯が下る一方、居住帯が垂直的に拡張する傾向を示している。このような過去三十年間における居住帯の高度的推移は、近世以前にみる居住帯の垂直的遷移を生ぜしめた原因を解明するうえで、一つの示唆を与えるものとして深い関心をひくのである。

上記のうち、標高や比高からみた居住帯の高度的な市は、現在発見されている遺跡や遺物発見地で示したため、まだみつからないものも予想され

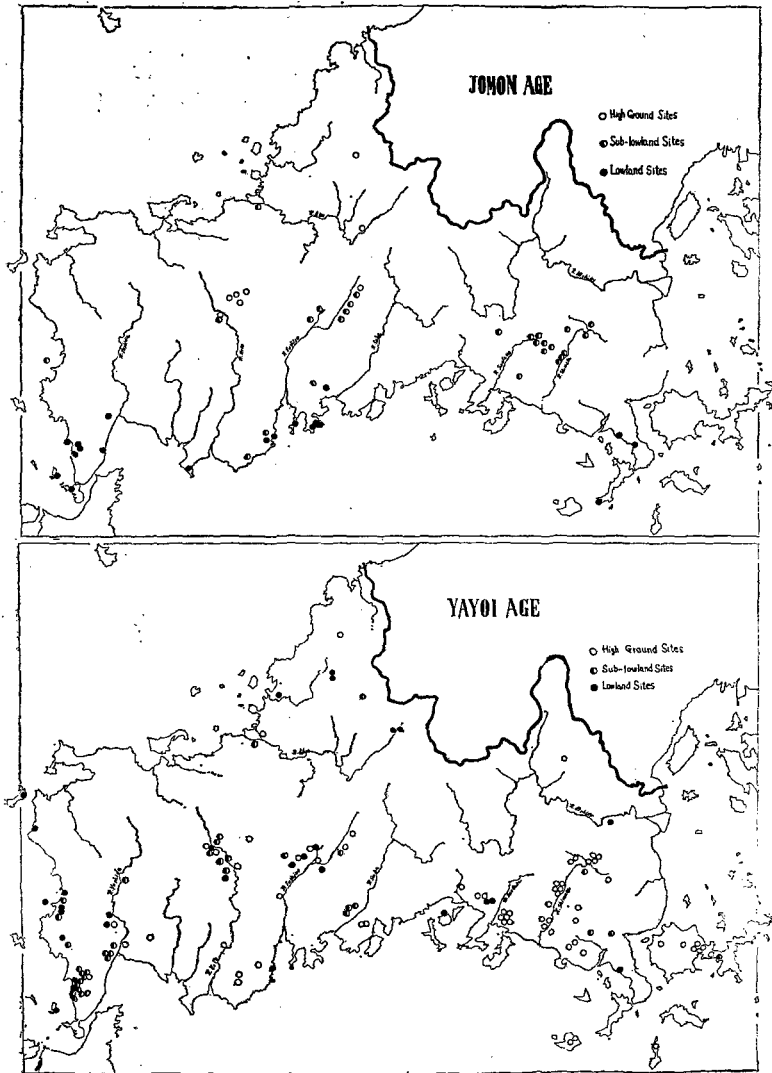
るので、厳密には極くおおまかな上下の限界を示しているにすぎない。また垂直的な重心帯も、各時代の自然環境と政治的・社会経済史的條件や、日常の生活が生産活動と結びついた所在地の地貌とからとらえる必要がある。第1図および第2図の傾向曲線は、縄文早期から現代にいたる居住帯の重心の高度的な推移を知るために、所在地の地貌と比高を中心に標高を加味し、遺跡の垂直的な分布の密度から引き出される重心の遷移をとらえ、大胆に蓋然的な傾向を示した曲線である。この傾向曲線が物語る、居住帯の巾やその重心帯の垂直的な遷移を生ぜしめた原因として、それぞれの時代の自然環境と政治的・社会経済史的條件の絡み合いを予想することができるのであるが、それならどんな直接間接の原因が働いたのであるかという、具体的な原因を解くことが当面の問題として浮び上ってくるのである。

#### V 先原史時代の居住帯の高度的変遷にみられる地域差

居住帯を高度からみた時代的な推移は上記のとおりであるが、その時代的な振幅の仕方は地域によって異なっており、問題点の摘出やその解決の端緒は、このような時代的な変化とその地域的相異の両面から引き出さねばならない。ここでは紙数の都合上分布図を示すに止め、垂直的遷移の地域差について極く概括的に特徴だけを要記しておくことにする。

先原史時代を通じ、厚東川ないし厚狭川の流域付近を境として、その東から周防地方にかけて高地性遺跡が卓越し、西部の長門地方に低地性遺跡が多い。また一上一下的な高度的変化は、周防地方に顕著で、厚東川以西、特に響灘斜面は概して安定した高度を保っている。

時代的にみた垂直的遷移の地域差は、文化小期によってかなりはっきりした差異がみられる。一般に縄文時代と古



第3図 山口県の主要縄文・弥生遺跡の立地分布図

墳時代には地域差が少なく、それぞれの土地の地形に従順に適応しているようである。これに対して弥生時代には地域差がなかり明瞭で、ことに中期の高地性遺跡の分布は、厚東川ないし有帆川以東から周防部にかけて卓越し、長門部には極めて少ない。弥生後期もほぼ中期と同様な傾向を示している。また、弥生前期の遺跡は西漸するほど多く、特に響灘の海岸地帯に集中し、これと反対に後期の遺跡が周防部に多く、響灘の海岸地帯に発見例が少ないことに注意をひく。なお条里の立地は、厚狭川を境として東部が扇状地や山麓の緩斜面に多く、それ以西では盆地床や河畔の洪瀆地に立地し、僅かではあるが高度にも地域差がみうけられる。

ことに上記のような、弥生時代の高地性遺跡と低地性遺跡の分布地域が、弥生時代の土器の地域差や、条里遺構の立地の地域差と照応し、かつまた、有史時代の畑作地域と水田卓越地域の分布とも一致しているのであって、弥生時代に高地性集落が出現し、居住帯の垂直的な巾が拡張した原因を、地形と生産様式の両面から解明するうえに示唆を与えるものとして、強く注意をひくのである。

## VI 結 語

以上において、遺跡の高度的分布を地形に結びつけ、居住地帯を垂直的な角度から極く巨視的に観察し、その遷移の過程を明らかにするとともに問題点の摘出につとめた。この調査と研究において、僅か六千九十八・七平方キロメートルの狭い地域においてすら、先原史時代の生活空間が、単に水平的に変化するばかりでなく、時代的に垂直的な振幅を示し、重心帯が一上一下するという遷移がみられ、しかもその仕方にかなり明瞭な地域差があることを知ることができた。

筆者は以前、弥生時代における集落立地の垂直的な遷移を生じた原因について、幾つかの予見的な推論を述べたことがあるが、これを根本的に解明するためには、単に一つの時代や一地方だけでなく、ながい歴史を通じ、類似した生産様式をもつより広い地域にわたって、個々の遺跡の遺構や遺物が示す物的証跡から考え、それぞれの時代の自然環境と、これに選択的に適応した人間側の両面から考究し、時代や地域について比較するという方法を通して検討を加える必要がある。

本稿は、このような観点から取り扱う一つの試みとして本州の西端部を取り上げ、その前提として特に時代的な遷移の実態を明らかにし、垂直的遷移の傾向をとらえることを重視した。垂直的居住帯に高度的な変化を生ぜしめた原因については、狭い地域から結論を出すことは困難であり、今後、広域の調査を進めた上で考えるべきで敢えてここでは触れないことにした。

- 注① 鳥居竜蔵 先史及び原史時代の上伊那 大正一五年、八幡一郎 佐久郡の考古学的調査 昭和三年、同 先史遺跡高距の調査結果大要 考古学論叢四 昭和一五年、森本六爾 日本農耕文化の起源 昭和一六年、同 聚落立地の移動 日本考古学研究 昭和一八年、三森定男 先史時代の集落 人類学先史学講座一八 昭和一五年
- ② 藤岡謙二郎 地理と古代文化 昭和二一年、同 先史地域及び都市域の研究 昭和二九年、三友国五郎 先史時代の集落地理学五の四、神尾明正 広島市牛田町西山二一〇m貝塚 人類学雑誌 五二の一二、井関弘太郎 初期米作集落の立地環境 資源研彙報一六
- ③ 小野忠瀨 原始集落の分布と立地の地理的考察 島田川 昭和二八年、同 台地性集落と壕状遺構 上掲書 昭和二八年、同 壘・壕遺構を有する古代村落址の研究 山口大学教育学部記念論文集 昭和三一年、同 本州の西端地方における古代の壘・壕遺跡 古代学五の二 昭和三一年、同 弥生時代の高地性集落と囲郭集落(要旨) 地理学評論 昭和三三年、同 弥生式集落の垂直的遷移現象に関する若干の問題 人文地理 昭和三三年、同 瀬戸内海の沿岸・島嶼における弥生式集落立地の垂直的遷移現象 日本考古学協会研究発表(要旨) 昭和三三年、同 瀬戸内地方における



- ④ 弥生式高地性村落とその機能 考古学研究 六の二 昭和三四年  
 小野忠熈 先史地域の諸問題 日本歴史地理学研究紀要Ⅱ 昭和三五年、同 考古地理学シンポジウム 日本歴史地理学研究会会員通信一七 昭和三七年
- ⑤ 小牧実繁 先史集落の地理 地球五の二九八、同 先史地理学研究 昭和十二年、三友国五郎 先史時代の集落 地理学五の四、同 先史集落に関する考察 地理学評論一四の三、鏡山猛 原始日本民族の聚落形成 日本諸学振興委員会研究報告 昭和十五年、三森定男 先史時代の集落 人類学先史学講座一八 昭和十五年、藤岡謙二郎 地理と古代文化 昭和二十一年、和島誠一 原始集落の構成 日本歴史学講座 昭和二十四年、藤岡謙二郎 先史地域及び都市域の研究 昭和三〇年、同 先史地理学 歴史地理所収 昭和三〇年、同 日本歴史地理序説 昭和三七年、藤岡謙二郎・小野忠熈 先史時代 歴史地理講座三所収 昭和三二年
- ⑥ 藤岡謙二郎 先史地域及び都市域の研究 上掲書
- ⑦ 八幡一郎 先史遺跡高距の調査結果大要 上掲論文
- ⑧ 中野尊正 日本の平野 昭和三十一年
- ⑨ 井関弘太郎 日本に於ける海面の相対的变化と沖積層 第四紀研究 昭和三十三年  
 岩田遺跡については発掘調査に当たった潮見浩氏の教示と筆者の踏査による。  
 また田ノ浦遺跡は発見者の三浦肇氏の教示による。
- ⑩ 下関市教育委員会の吉村美広氏が作製した遺跡分布図と筆者の踏査による。
- ⑪ 藤井三男が作製した田部盆地の遺跡分布図と筆者の踏査による。
- ⑫ 宇部市域古代遺跡調査団によって作製した遺跡分布図と筆者の踏査による。
- ⑬ 村田益男と三浦肇両氏の作った遺跡分布図と筆者の踏査による。
- ⑭ 協運雄氏が作製した遺跡分布図と筆者の踏査による。
- ⑮ 小山良一氏が作製した遺跡分布図と筆者の踏査による。
- ⑯ 小野忠熈 山口県先史時代遺跡遺物発見地名表と分布図、いずれも島田川に所収 昭和二十八年  
 濱田清吉 秋吉台の遺物発見地とその遺物 秋吉台カナル所収 昭和二十八年、小野忠熈 考古学上より見た秋吉台

秋吉台学術調査報告所収、昭和三二年

⑬ 小野忠瀨 島田川流域の遺跡遺物発見地名表と分布図による。注⑭

⑭ 防府市の仁井令では条里地割の下限が標高二・三m内外、下松では五m以下で何れも低いが、三輪正房博士の地盤運動の研究「山口県瀬戸内海海岸の沖積期における基盤傾動に口する研究」昭和三五年から推して、これらは条里施行以後、佐波川構造線以東が沈降したためではないかと考えられる。

⑮ 秋本元之 都濃郡長穂地域の開発に関する研究 山口地理学会年報三 昭和三六年

⑯ 小野忠瀨 考古学上より観た秋吉台 注⑰

松村茂 山口県における人工海岸 山口地理学昭和三七年度研究大会発表

中野一人 弥生式土器からみた山口県域の地域性 考古学研究 昭和三七年

なお、個々の遺跡の調査報告は紙数の都合上省略した。